

書店力

森の六畳書房

北海道浦河町

テーマソングもある！

週1日営業の自宅本屋さん

馬の産地として知られる北海道の日高地方。

その南部に位置する浦河町は「サラブレッドの町」として名高い。

馬の育成環境は申し分ない浦河町だが、

人口約1万2000人に対して、まちな本屋さんはゼロ。

この窮地を救ったのは一軒の「自宅本屋さん」だった。

神奈川県に住んでいた櫻井けいさんが自然豊かなセカンドライフの移住先を探して、夫の廣志さんと初めて浦河町を訪れたのは2012年（平成24）のことである。涼しい気候と町の移住担当者の熱意、そしてコンパクトにまとまったまちのつくりが気に入って移住を決意した。しかし当時は、まさか自分がここで「本屋さんデビュー」を果たすことになるとは、夢にも思っていなかった。



店主の櫻井けいさん（左）。夫の廣志さんは書棚を作ってけいさんをサポートしている。

その二口店長の一人だった。初代「六畳書房」は当時、多目的コミュニティスペースとして使われていた民家を利用し、文字通り六畳の和室で週1日営業。地域おこし協力隊を中心に有志が交代で「店番」を務めたが、町民も本を毎回買って応援するとうわけにはいかず、売り上げは苦戦続きだった。開店3年目で閉店が決まったが、そのとき「うちでよかったら続けましようか」と名乗り出たのがけいさんだったのだ。

「読書はずっと好きでしたが、書店経営なんてしたこともない。きっと、よくわかってなかったから言い出せたんだと思います。夫にも相談しないで独りで決めちゃいました」

2018年3月19日、緑に囲まれた自宅の居間を店頭として「森の六畳書房」をオープンした。営業日は毎週月曜日。仕入れ先は前店から引き継ぎ、子どもの本の専門卸「子どもの文化普及協会」に加えて、中小書店と直取引をしてくれる中央社の口座を開設。売り上げ冊数は毎月2桁台だが、半分が客注とは立派なもの。「この店から買いたい！」という支持者の気持ちも伝わっている。

2019年（令和元）春には

隣町の様似（さまに）町と日高町日高区で出張販売を行った。あわせて40冊以上の本が売れ、「またぜひ来てください」の声も受け取った。

「うちのようない利益追求ではない市民活動感覚の本屋であれば、小さい町でもやっていける。時間と元気がある人たちが協力し、本を回す場を作っていくといいですね」

「六畳書房」継承が広まると、

看板制作やブックカバーのデザインなど協力者が次々と現れ、とうとう店のテーマソングまで贈られた。作詞・作曲・歌はライブアーティストの熊谷章三さん。「この町のほん屋さん六畳書房日曜日はゴメンね 月曜日だけ」。思わず笑ってしまう歌詞も愛されている証し。月曜日に行きたくない、やさしい魔法をかけられた。

（佐藤優子）



1 櫻井家の居間が店頭に変身。絵本、小説、エッセイ、ノンフィクションと幅広いジャンルを取り扱う。2 「六」のマークのブックスタンドは今なき札幌のくすみ書房から初代六畳書房に贈られたもの。櫻井さんが受け継いだ。3 レンガ壁の家と緑色の看板が目印の「森の六畳書房」。